

Book



『若者はなぜ3年で辞めるのか？』 年功序列が奪う日本の未来

城 繁幸 著

光文社新書／735円

希望と現実のギャップ、年功序列の 機能不全が早期退職の最大理由

昔から若年労働者の早期離職問題は大きな課題として横たわってきた。新規学卒労働市場が中卒から高卒、さらに大卒へと代わってもこの現象は続いている。離職の理由は、日本経済が高度成長を成し遂げた時期を境に、質的に変化した。昭和三〇年代から四〇年代にかけては、多くの若者は少しでも賃金などの労働条件の良い会社へと移動した。そして、高度成長を遂げ、我々の生活が物質的に豊かになると、今度は「心の豊かさ」を求めるようになり、達成

感、やりがいなどが仕事の場で求められるようになった。九〇年代に入ってバブルが崩壊し、経済が長期にわたり低迷をはじめた頃から、モラトリアム世代、フリーター、最近のニートという言葉で表される行動を取り始める。彼らは「自分に合った仕事がない」という理由で現実から逃避する。一方で、格差社会の到来により企業のグレード等に敏感になって就職活動に熱中している多くの学生たちがいるのも現実である。

今の日本の産業社会は年功序列型から成果主義型へ代わったといわれるが、果たして若くても本当に活躍できる時代になったのだろうか。若者たちが望むような「心の豊かさ」を得ることが出来るのである。本書は、若者の視点に立って、彼らをとりまく問題の本質を解き明かそうとする。社会的に知名度の高い大企業に、長期間継続して勤務していると高い評価を受ける社会意識を著者は昭和的価値観と呼ぶ。この価値観にとつて重要なのは、本人の能力やそれによる収入ではなく、

「あるシステムに乗っかっているかどうか」という。このシステムこそ「年功序列」と呼ばれるものであり、現在も健在だといふ。若い時の待遇はけつてよくはないが、それは将来の出世という形で支払われ、長い目で見れば十分ペイするシステムだといふ。若い時分の頑張りに対する報酬は、将来必ず得ることが出来るから、必然的に勤続年数は長くなる。そうした権利を手に入れた若者が何故、数年で途中下車してしまうのか。

時代の流れの中で、「自分探し」「仕事に対する意識」が高くなった若者は、入社後、希望と現実とのギャップに直面し、報酬システムとしての年功序列は機能不全を起してあり、へたをすると働き損で終わるかもしれないと気づく。彼らが途中下車する最大の理由だと指摘する。

今後ますます個人主導型のキャリア形成は強まるであろう。とすれば、企業は、社会はどう対応すればよいのであろうか。

評者／宮崎 利行

(労働政策研究・研修機構アドバイザー・リサーチャー)



『働きがいを感じる会社』

梶原 豊 編著／
同友館／2,415円

**職場のマoral、モチベーション向上のための
ヒントになる企業事例を豊富に掲載**

多くの経営者は、異口同音に企業にとって最も大切な経営資源は人であるという。そして実際、社員にとって「働きがい」「やりがい」のある職場にすべく、さまざまな取組みが企業によってなされている。

本書は、総論部分において企業に対し、企業市民としての自覚と行動を求める。企業は、経済的責任だけでなく、法的責任、倫理的責任、社会貢献責任などを認識し、これらに適切に対応するため、経営理念、企業行動理念の明確化、企業倫理の確立に向けて真摯に取り組む必要があると強調する。しかし、いかに崇高な経営理念等を掲げて、現実の企業行動に反映されなければ、職場のマoral、モチベーションは低迷し、その回復は容易ではないとする。著者は、企業のマoral・サーベイや職場活性化診断等に携わってきた経験に基づき、それぞれ特色をもった人事施策を行っている資生堂、東芝、日本IBM、イオンなどの企業事例を数多く紹介し、これらの事例をベンチマークとし、自社の働く現場や制度等の改善の契機にしてみたいとする。

なお、最終章においては、企業倫理、女性活用、高齢者雇用・活用など八つの角度から職場自己診断を行うためのチェックシート(リスト)も用意している。



夫から妻へ、妻から夫へ 『60歳のラブレター』

NHK出版 編／
1,260円

**静謐な魅力が
人生の慈しみを感じさせる**

六〇歳を還暦という。本卦がえりともいう。六〇歳で再び生まれたときの千支に還ることからこつというようになったのだろうが、六〇年という我々の世代は、高度経済成長期の企業戦士として、バブル崩壊、景気低迷、リストラ、自殺、教育の荒廃などさまざまなことを経験してきたが、これからのことを考えても、自信満々に人生を送っていく自信はない。

本書は、住友信託銀行が二〇〇一年一月二二日(いい夫婦)を記念して、セカンドライフの応援歌として始めたものである。今回も一万通近くもの応募が寄せられている。

六〇年もの幾星霜を経てきた夫婦にとって、「ラブレター」という言葉にはいくらかの逡巡をおぼえる。それは、永年人生を相手に一緒に戦ってきた同志への愛を感じても、ラブではない感じがするからである。

それにしても、本書に収録されている静謐な作品の魅力にはひかれる。ささやかな日常の美しさ、ささやかな記憶の豊かさ、相手に対するあふれんばかりの想い、そうした感謝や祈りを込めた一つひとつの言葉が輝いていて、人生の奥行きと慈しみを感じさせずにはおかない。



『心と体のことわざ養生術 五〇歳から貝原益軒になる』

山崎光夫 著／
講談社／1,470円

**貝原益軒の知恵と精神に学ぶ
健康管理の極意**

ダイエットにサプリメント、さまざまな病氣予防法など健康ブームはとどまるところを知らない。むしろ高齢社会を背景に、健康や食事への関心は一層高まるばかりである。いきおい、江戸時代まで遡り、貝原益軒に学んでみようというのが本書である。

益軒は、江戸時代の庶民の平均寿命が四〇歳に及ばない時代に、八五歳までの長寿を得ている。それだけにその著書『養生訓』はいよいよ輝きを増す。この書のなかで、益軒は地位や財産よりも健康が一番であり、五〇歳ではまだ人生の道理も楽しみも知っているとはいえず、この歳で亡くなるのは若死にであるとする。養生法としては、まず心の平安や精神のありようがいかに大切かを説き、次いで日常の健康法を詳述している。生まれつき丈夫でなかった益軒にとって、長生きは人生の目標を成し遂げるための要件であったのだろう。無理できない体でどう生き、どう家庭を築き、どう仕事をこなすか、益軒は多くのことを教えてくれる。

益軒の著作は、生涯で九八部一四七巻にも及ぶが、そのほとんどが五〇歳を過ぎてから刊行されたものだといふ。本書は、生活設計、健康管理を含め、益軒の人生哲学に手軽に触れることのできる一冊である。